



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	英国のフットパスと地域活性化 : Walkers are welcome タウンの活動
Author(s)	塩路, 有子
Relation	歩く滞在交流型観光の新展開 The New Development through Extended Stay and Interactions with Locals in Walking Tourism
Citation	CATS 叢書, 12, 87-103
Issue Date	2019-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73759
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS12_10.pdf



英国のフットパスと地域活性化

—Walkers are Welcome タウンの活動—

塩路 有子

阪南大学国際観光学部国際観光学科教授

よろしくお願いいたします。今日はお招きいただき、発表という機会を与えていただき、誠にありがとうございます。簡単に自己紹介を兼ねた研究の経緯をおはなししたいと思います。私は、民博の大学院である総合研究大学院大学で石森先生のもとで博士課程の学生として二十数年前過ごした訳ですが、そのときに文化人類学ですが、イギリスで文化遺産と観光というテーマで博士課程の研究調査を始めました。イギリスの調査は今年で 23 年目に突入します。当時からイングランド南西部のコッツウォルズ地域というところをフィールドのエリアとして研究を進めてきました。文化遺産というと堅いイメージですが、お祭りや踊り、建築物、人々がどうい生活文化を創り出し、かつ、それをどのように活用しているのかというようなところを研究調査してきた者です。文化遺産を研究したということもあり、文化遺産を保全管理するトラストのようなチャリティーの活動、アソシエーションとかに興味を持ち、コミュニティ内のアソシエーションやチャリティー、もっと大きな規模のチャリティーがどんな活動をしているのかを研究調査してきました。

2013 年に筑波大の前川先生にイギリスのフットパスのお話をしてほしいとお声かけいただき、そこからです。フットパス調査に入った訳です。それまでは、イギリスで調査の合間の休憩程度にフットパスを歩いていたりとか、羊をのんびり眺めていたりとか、人間関係に疲れていたのかをこういうことをしていたのですが、ついに自分の楽しみまで研究対象にしてしまった次第です。

さっそく、英国のフットパスと地域活性化ということで、お話をしていきたいと思います。これが今日の流れです。

英国のパブリック・フットパス。フット+パスということで、小道、自然道、公式にはパブリック・フットパスと呼ばれています。つまり、公共の自然道。誰でも歩くことができる小道ということです。昨日、木村先生もお話しいただいた、英国におけるフットパスの総距離は、ナショナルトラストの推計ですが、だいた 20 数万 km あるといわれています。網の目のようにイギリス全土をフットパスが覆っているという状況です。木村先生よりも少ないですが、年間 8 千億円の経済効果がある。いずれにしても 1 兆に近い経済効果を生んでいる。歩くと喉が渇くので飲み物を買う。パブに入って 1 杯ビールを飲んだりご飯を食べたり、宿泊したり、そういったことを含めて経済効果がある。イギリスにおいて歩く観光というのが非常に経済的効果をもたらすしっかりとした観光として成り立っていると

というのが大きなところですが。その背景には歴史的な要素がある。パブリック・フットパスというのはイギリスで法的に守られている側面があります。これがすごく特徴的です。歩く権利＝パブリック・ライツ・オブ・ウェイといいまして、歴史的・社会的背景の中で形成されてきたものです。

パブリック・ライツ・オブ・ウェイの中には色んな道があるのですが、フットパスがそのひとつです。そのほかに、ブライドル・ウェイのように馬が通る道など、雨がよく降るのでぐちゃぐちゃになったりガタガタになっていたりするところもライツ・オブ・ウェイにはあります。その中のひとつがフットパスです。イギリスのパブリック・フットパスには、昨日、ロングトレイルの話が出ていましたが、ナショナル・トレイルとして、国指定の長距離歩行道というものもあります。これが15本ありまして、走行距離が4,000km以上。1本が数10kmのものから、1,000kmにいたるものまで、長さはいろいろ。見ていただくと分かるように、色を変えています。海岸の上を歩いたり、丘陵地帯や牧草地を歩いたり、ヒースの中を歩いたり、森の中を抜けたり小川沿いに歩いたり、あるいはスコットランドの方に行くとき色んなところを歩いて行く。非常に多様なコース、自然の景観もいろいろなものがある。一方で、国が指定したものと違って、地域の人々に身近なフットパスとして、州とか府とか市町村の各レベルでトレイルとかフットパスがあります。グロースターシャー(州)ウェイ、とかコッツウォルド(府)ウェイ、これは後にナショナル・トレイルになります。ウィンチコム(町)ウェイなど、こういったレベルでフットパスがある。これはもっと多いですが、特定の名前はないけれど地元の人たちに通り道として知られているフットパス。名前はないけれど地元の人たちが通る道、牧草地とか畑とかの名前でアクセス可能なオープンスペースとしてその場所の名前で知られているフットパスというのがあります。

写真はコッツウォルズ地域北部のチップینگ・カムデンという町で調査したときの写真です。教会の後ろにナショナルトラストの所有している牧草地が広がっていて、それがパブリック・フットパスが通る道、空間になっています。道路が右側にあり、道路を隔てて塀を越えまして、敷地に入る。だいたい人が通っているフットパスの跡がありますので、ここを通ればいいのかというのが分かります。石垣、家と家の間を通ることがあります。これは標識ですが、石でできているフットパスと書いてある標識だったり、小麦畑で小麦が育っている間をガサガサと抜けるようなパブリック・フットパスもあります。下は野菜の畑を抜けるフットパス。農家は、法的にパブリック・フットパスが守られているので、そこは絶対に道としておいておかないといけない。そこは何も植えてはいけないという義務があります。

フットパスの歴史を簡単に振り返っていきます。英国では歩く道として、巡礼の道とか羊など家畜を移送する道、あるいはロバが荷物を運ぶ道、ローマンロード、ローマ人が紀元前に侵攻してきたときに作ったまっすぐな道、普通に村をつなぐ道、教会に行く道、日常生活のための道というのがそもそもあった。それが18世紀になると変化が生じる。大地

主がいて、下に小規模な土地持ち農民がいて、あとは「コモンズ」、共用地で生計を立てる農民がいる。特に共用地で生計を立てる農民は、もちろん農地に出るためもそうですが、レクリエーションのために、共用地の野山に出かけるための自由を持っていた。それが 18 世紀の囲い込みによって変化する。第一次囲い込みで、大土地管理が可能になって、地主が小作地を回収しまして、コモンズを買収して私有地とする。第二次囲い込みになると英国の農業が資本主義的な大規模農業経営になってきて、大地主や農業資本家などが大規模な穀物生産の効率化を目指して大規模な囲い込みを行ったということで、どんどん共用地が消えていった。庶民はレクリエーションの場を失っていくということになっていくわけです。

次に 18 世紀半ば以降の産業革命以降の近代化、工業化、都市化の流れのなかで、郊外、カントリーサイドの自然環境の破壊が行われた。日本の高度経済成長に破壊が行われたのと同じですが、百年間のスパンでイギリスでは起こった。18 世紀の半ば以降に産業革命を受けて開発の波がカントリーサイドまで広がり、カントリーサイドが危機に陥った。自然、歴史的な遺産、環境が破壊されていったといわれています。19 世紀末から 20 世紀の 15 年間で 20 万 ha の林地とか農地、共用地がなくなったといわれています。

そういう環境破壊的なことに対して、反対の行動に出たのが 19 世紀半ば以降の環境保護団体の形成。1865 年に共用地保存協会というのができて、それから 1895 年にナショナルトラストができるという流れに結びつく訳ですが、いずれの団体も民間の人たちが結成して全国規模の活動になったというカントリーサイドの環境を保護しようという流れです。18 世紀後半以降のそういうものがベースにあった上で、環境保護団体により自然環境が保全されている中で、次のことが起こっていくわけです。

フットパスをめぐる歩く権利の獲得。産業革命以降のヴィクトリア朝が大英帝国としてだんだん豊かになってくる中で、いろんな活動が大衆化していった、いわゆるレジャー活動の大衆化という近代観光の流れにこれとは別に入っている。環境破壊と同時に大英帝国として余暇活動が大衆化していき豊かになると同時に変化して動いている。第一次世界大戦のあと、北部の工業都市であるシェフィールドとかマンチェスター、バーミンガムといったところの労働者たちが散策を楽しむようになった。少し余暇を楽しむ余裕が労働者にもできた。それと労働時間の短縮や有給休暇制度の導入などでそういったことが促進されるようになっていくという社会の流れがあります。

北部の工業都市の中で、ピーク・ディストリクトが人気の散策地になりました。そこにあるキンダースコットという丘で事件が起きます。この丘の地主が雷鳥を保護するという口実で労働者に入って欲しくないため、囲い込みをした。立ち入りを禁止しようとした。そういうことに対して自分たちの歩く楽しみを奪ったということで、抗議行動をして 400 人の人々が丘の頂上に立った。それを警察に通報され不法侵入としてリーダーの 5 人が逮捕されるという事件が起きた。これはランプラーズ協会のロビー活動につながって、歩く権利法の成立に結びついていくという流れになっています。

フットパスに関する法的整備が、右側にレジャー活動と環境保全等と書いていますが、キンダースコット事件で歩く権利法が成立して、そのときちょうどレジャー活動としてパーク・ディストリクトが人気の観光地になっていったということです。

1949年には国立公園法にカントリーサイドへの立ち入りを認める法律が併記されるようになり、1970年代から80年代、より一般大衆が車を使ったりする時代になり、カントリーウォークというのが盛んになる。1990年に歩く権利法が改正され、フットパスを地主の都合による閉鎖から守ることが強化されました。地主が、「家畜が被害を受けるから」「農作物に危害や被害が生じるので人に入ってきて欲しくない」といって、自分の農地や牧草地に塀をしたり囲ったりすることは許されない。もし、そんなことをすると訴えられるという状況ができる。ちなみに1980年代以降になると、政府や地方行政がカントリーサイドの環境保全の現代版を政府がやるというバージョンを促進。同時にカントリーサイドにおける文化遺産とか観光を促進する、70年代くらいから始まっていますが、英国政府観光庁を通じてカントリーサイド、カルチャー、ヘリテージの3つのキーワードで文化遺産観光を進めて来た。文化遺産観光を進めつつ、環境も保全していく。現場であるカントリーサイドの環境も保全する両方のバランスを取りながらやっていったという時代。2000年に入りまして、今度は法律のほうでは「カントリーサイド歩く権利法2000」ということで、歩いている荒地とか森林地など、これまで対象になっていなかったところも対象としたパブリック・アクセス権が確立します。最近になると政府、地方行政が今度は健康・福祉関連の一環としてウォーキングを活用して、それに対してフォローするようになるというのが含まれました。そういう流れがあり、フットパスを巡る「Wakers are Welcom 活動」というのが生まれてくる訳です。

このWakers are Welcom Townというのが2018年2月現在で100の市町村が登録しています。この組織結成の経緯は北部イングランドの町、ヘブデン・ブリッジというところで一住民がフェアトレード・タウンという思想を、フェアトレードのタウンですね。それに賛成するタウンというコンセプトからWaWのコンセプトを着想したというものです。つまり、既存の主要な観光市場に頼るのではなく、マスの人々を相手にしたマストツーリズムを推進するマストツーリズムの拠点になるような、市場に頼るのではなく、ウォーキングとかウォーカーという目立たない少数派に注目することで地域振興に導こうとするコンセプトで、2006年にこの人が提案し、2007年2月にWaW協会、全国組織が形成されます。つまり、草の根の組織体を志向して形成していく。この10年で一種の社会改革、コミュニティ・レベルですけども社会改革的な活動にこのWaWタウンの活動が発展、展開しているという状況です。

このWaW協会には最初に6つの目的があります。まず、人にとって魅力的な目的地にするためにその地域のウォークに関する最善の情報を提供する。地域の人々と訪れた人々に地域内でもっともいいウォーキング機会を提供する。これは地域の人たちに対して、例えば週2回「ウォーク開催しますから来てね」ということや、ウォーキング・フェスティ

バルを開催するということですね。それからウォーカーにとって、フットパスや施設をうまく維持、改良、標識されていることを保証する。まずは彼ら自身が試し、連携している部分と一緒にやってもいいし、何かしら歩くことがうまくいくようなことをしていく。さらに、地域の観光計画と再生戦略に貢献する。それからウォーキングによる健康効果促進、参加者の増加。それから公共交通機関の利用を奨励する。この6つの目的を WaW 協会が持っています。

それらの目的に基づいて、WaW タウンに登録するための条件が6つあります。このコンセプトに対して地元の支援を多数得ていることを表明する。例えば、地元のその町の人口にもよりますが、署名をどれくらい集めるかというレベルが規模によって違うが、署名を集めることを表明する。それから地元の行政がこの WaW タウンの登録申請を公式に認めて認可している。それから地域のフットパスを良好な状態で維持するために常に行動している。WaW のタウンであるというステイタスに対して適切なマーケティングを行っている。それから公共交通機関を使ったウォーキングを奨励している。そして、WaW ステイタスを維持している場所としてのメカニズムを表明するという。これはどういうグループでどういう風にやっているか、将来にいたって WaW タウンを維持できるという証明になります。

実は昨年度、全国の WaW タウンの100あるうちの75.9%が回答したアンケートのサーベイが行われ、その結果をまとめたものがあります。これが全国展開しているグループの10年間の成果と言えるわけですが、1個ずつ見ていくと1,200本のウォーキングルートを作ってそれをパンフレットや冊子、WEBなどで紹介する。開発したルートの種類はレクリエーション的なもの、歴史的なもの、ファミリー、子ども向けのもの、健康促進のためのもの、身障者アクセス向けのものがあります。公共交通機関の利用については65%の出版物に含まれている。

ウォーキングルートを維持して多くのほかの団体、地域行政とか地元の団体グループとか、ウォーキンググループとかと地域のフットパス等、歩く権利の改善に取り組む、取り組んでいるところが多い。維持管理の内容としてはフットパスの枝が道上に出ていたり草が生えていたりしたらきれいにしたり、とにかくフットパスを明確に分かるようにクリアにしたり、ゲートや踏み台にあたるスタイルを設置したり修理したり。それからフットパスの問題、フットパスにまつわる課題を地域行政に報告する。標識とかゴミ拾いなんかもする。全国の WaW タウンは29%が長距離トレイル、ナショナル・トレイルなんかの維持管理にも関わっている。

43%がウォーキング・フェスティバルを開催していてその資金が行政からのものとか、地元のスポンサーなんかからお金をもらっている。WaW タウンになると、WaW here というステッカーを貼るのですが、それを宿泊施設やバブ、商店に貼って、「ここが WaW タウンだよ」ということを表明する。WaW のウェブサイトとか、ステッカーとか SNS とかで交流する。活動資金としては行政その他の補助金などでまかなっている。100あるので、多様な形があるが、そういうことがサーベイによって明らかになりました。

ここで具体的にコッツウォルズ地区のウィンチコムという人口約 5,000 人の町を事例として取り上げて話していきたいと思います。

この町は 2000 年から 2009 年に町の商店やパブが次々に閉店していくという寂しい状況の町で、静まりかえっていた。そんな 2009 年、ある住民シーラ・タルボットさんが町の議会で WaW タウンを提案しました。「こういうのあるよ」とパブリックミーティングのときに提案した。そうすると町議会議員全員が賛成した。協力を申し出て準備金 500£ くらいを支給してくれた。8 万円くらいですね。それを元手にワーキンググループを結成し、既存のフットパス（ずっとある訳ですが）、それを活用した周遊型のウォーキングルート、「ウィンチコム・ウェイ」というのを考案しました。そのウォーキングマップを作ってそれを広報する。紙媒体でもそうですし、WEB でも。そうすると徐々に町を訪れるウォーカーが増加し、それを受けて、パブや商店、ホテルが活気を取り戻していった。それを見た観光案内所、TIC とかボランティアガイドの人とか町の景観保全団体もこの活動に協力するようになります。フットパスによるまちづくりに賛成するようになる。町全体が WaW のステッカーなどの店が多かったりして、フットパスやウォーキングに対する支援をする、そういう町なんだという雰囲気になる。その結果、ほかの住民もウォーキングは面白そうだなと関心を持つようになる。彼ら自身も歩くことによって自分たちが知らなかった町の自然環境、その変化、開発問題などに注目するようになるという変化がもたらされた。

これがウィンチコムの町中です。歴史的な町で、中心部には教会がありその周辺には牧草地が広がっている。町中を歩くトレイルもあるが、自然環境のいいところの中で自然を歩くフットパスがある。このように「Discover The Winchcombe」みたいなパンフレットがあったり、ウィンチコム・ウェイのオフィシャルガイドを WaW が出版したりということをしています。町を周遊して 8 の字型に歩くと必ず町の真ん中に戻ってくるというのがウィンチコム・ウェイの特徴。そこで必ず消費活動が行われるということが設定されている。そもそも既存のフットパスをこういう形につなげたということです。

このウィンチコム・ウェイのグループとしては、活動メンバーは当初 12 人、現在 9 人ですが、発起人である人はナチュラル・イングランド勤務。昨年から昨年くらいに退職されましたけども、WaW のことをご存じだったので、提案した。その旦那さんがウォーキング旅行会社に勤務していて、ウォーキング・ガイドをやったりしている。それから町議会議員が全員賛成したということでそのうちの熱意ある 4 人がメンバーに入ったり、宿泊施設経営者や商店主、行政府に勤務している人、自然保護団体のメンバー、もと銀行支店長など。いずれの方もウォーキングとか自然保護、維持管理活動を日常的に行っている人々で地域活性化に対して、非常に積極的に取り組む姿勢を持っている人々です。彼らの活動内容ですが、フットパスの維持、管理、活用、フットパスの見回りをする。でも、彼らだけでなく、地域の自然保護団体とか町の景観保全団体などと協力して、情報交換しながらそういうことをしています。観光案内所、ボランティアガイドとも連携する。「今度、ウォーカーの人、これだけ来るからよろしくね」というようにして、観光ガイドをしてもら

ったり、観光案内所に連れて行ってもらったりする。

また、町の商店に協力を呼びかける。さきのステッカーを貼ってもらう、週に 1, 2 回広報をする。毎年ウォーキング・フェスティバルを開催する。それから地域の刊行物、地方紙、WEB に広報して、WEB にはマップも掲載しています。やってくるウォーキンググループやほかの WaW タウンにも情報を提供するということをしています。

このグループはそれぞれ既存のボランティアグループ、自然保護団体、景観保護団体、ボランティアガイドなどの人たちとうまく連携しながら活動しているという特徴があります。「ウィンチコム・ヒストリック・コッツウォルズ・タウン&センター・フォー・ウォーカーズ」となっている町のパンフレットですが、ちゃんと下のほうに WaW のウェブサイトのアドレスを付けています。

開くとこんな感じです。濃い緑のドットのところがフットパスです。このフットパス、よく見るとウィンチコム・ウェイがあつたり、コッツウォルド・ウェイがあつたり、ナショナル・トレイルになっているコッツウォルド・ウェイでつながっていたりとか、さらにグロースターシャー・ウェイがあつたりとさまざまなレベルのフットパスが交差しています。さらに細かい普通に人々が散歩道として使うようなフットパスもある。10 数 km を 1 日に絶対歩かなくてはいけないということではなくて、ちょっとした 30 分のウォークでもできるというようなことが可能な町です。

こういう Walkers are Welcome の黄色と黒のステッカーを既存のパブリック・フットパスの標識の横に貼って、WaW タウンだよというふうに見せたりとか、さっきのパンフレットの地図のところをバス停の横に看板として設置したりとか。羊がいる横を通る道だったりします。

この町の商店でウォーカー向けのグッズ、オフィシャルガイドを置いたり、ウォーカーが必要な飲み物、歩きながらも食べられるチョコレートバーみたいなものを置いていたり、ウォーカーに対する情報を提供しながらウエルカム雰囲気を出している。これはホテル、INN、宿泊施設です。WaW here のステッカーですが、これがウインドウサイドに貼られている。ここの INN はウォーカー用にやや安い。リーズナブルな部屋を提供してしまして、ウォーカーが喜んで泊まっています。

これが観光案内所ですね。ウォーキングマップがあつたりとか、WaW になってからウォーカーが増えたり、観光案内所を訪れる人が増えましたよ、ということです。

フットパスを巡る町における関係ですが、維持管理する人々、活用する団体などがあります。維持管理には地域の自然保護団体、景観保全団体、それからコッツウォルズは AONB という特別自然景勝保護地域、ナショナルパークである国立公園の次のレベルの保護地域に指定されているので、それを管轄するコンサベーションボードとか維持管理する団体。WaW グループはそれにも働きかける。活用としてはホテル、民宿や商店、ボランティア・ガイドがフットパスを活用して活動する。そこにも働きかけるし、観光案内所とか町議会とかさらにその上の地方政府にも WaW のグループが働きかける。というような連携を取

ったりしています。さらにコッツウォルズ・ツーリズム・パートナーシップという DMO にもはたらきかけながら、こういう風に広報して欲しい、こういう情報を載せて欲しい、ということをやったりしています。このように、ほかの団体との関係性が構築されているという状況がありました。ウィンチコの WaW タウンとして、このグループはほかのイギリス内の WaW タウンとの交流ですとか情報交換もしています。

この 4 年、5 年くらいに私はだいたい 22 か所くらいの WaW タウンに行ったのですが、簡単にそれぞれの特徴と違いを書いてみました。イングランドは歩くことに興味のある活動的な人々によって運営されている。ウェールズもだいたいイングランドと同じ。スコットランドはそういう人たちと一緒に、農家、地主側のどちらかという歩いて入ってこられたらちょっとなという姿勢を持ちやすい地主側の農家もスコットランドでは活動メンバーに入っている。ウォーカー目線だけじゃない、ウォーカーによって家畜に被害を被るとか農作物に影響があるというようなことも多角的に考えられるグループがスコットランドには存在していてすごく特徴的だなと思いました。それから、ヘブデン・ブリッジ、WaW 発祥の地ですが、イングランド北部ではほかの地域と比べるとより自分たちで理実的な活動視点を持っている。コミュニティを自分たちで良くしようという意識が非常に強い。それがイングランド北部。だいたい緑のカッコにしているのが内部とか近いとか外れとか、ナショナルパークとか AONB エリアの自然環境の美しいエリア、近くとか外れとかに位置している。位置的な場所です。

これは写真です。上からスコットランド。元炭鉱の町が運河をきれいにしてその横を歩くようにしていると、炭鉱跡の遺跡をヘリテージ・トレイルとして長いフットパス、ルートを作ったりしている。ここも労働者の町だったので、非常に改革意識が強い。スコットランドの観光地でメルローズという可愛らしい町で観光客がすごくいっぱい来るところなのですが、WaW があってこのフットパスルートを作ったり、整備したりしている。

この下のヒースのすばらしい景観で夏に行ったら感動したのですが、イングランド北部のこれはさっきのみなさんのお手元の資料で見ていただくと、北部のオトレイとかバーレイとかエイルドン、ミングレイといったところが「ウエルカム・ウエイ」というそれぞれの町をつなぐ大きなルートを作りまして、そのうちのひとつを案内してもらい、ヒースが咲いていて非常に素敵なおとこです。その町とか村のウエルカム・ウエイの WaW 活動をしている人の写真です。

それから、これがヘブデン・ブリッジです。コットンの工場があり、溪谷の中にある町でして、谷のいたるところにそういった工場が産業革命の頃にあった。人々は谷の上に住んでいて、働くために谷の下に行く。そういった人々が工場に行くための道がフットパスとして残っていて、産業革命以降の人々の歴史の道というのが体験できるような町も面白い。その近隣である町も、ヘルス・ルートといって、フットパスの横にハーブとか野菜が植えてあって食べたりしながら歩けるといふ面白いことをやっている町もある。北部は面白いなと。

これは、ロス・オン・ワイというところですよ。ワイ渓谷の AONB の中にある町。ロスではグループの人が WaW の全国組織の会長さんですけども、その人と幼なじみの町長、と新しく移住した人たちがその活動を盛り上げている。

それからウェールズの元町長が陶芸家で、陶板でヘリテージ・トレイルの標識を作ったり、長いロングトレイルを指し示す地図を陶板で作ったりする活動をしていて、古いものを自分たちのアイデアで表現している町もある。

また、これはウィブリスコムというところで、エクスモア国立公園に近いところにある。ナショナルパークでもないし、AONB でもないのですが、そこでは WaW が地域活性化のひとつの方策としてその他のアクティビストの間で共有されている。そういう人たちが集まって、活性化していく。この右側の入れ墨があるお兄ちゃんですが、30 代くらいの若いパブを経営している人なんですけど、この人が子どもたちの歩く道を自分で歩いて見ながら、いろいろ考えてルートを作った。子どもウォーキングを実施して、パブにやってくる 10 代の若者に声をかけてウォークに参加してもらっている。珍しいタイプですが、若い人でこういう活動をしている人もいます。

それからナショナルパークの中にある宿とか海岸沿いだったりとかナショナルパークのレンジャーみたいな人も WaW の活動に協力する、連携するという姿勢が見られました。

この活動スタイルと課題ということで、基本的に住民が主体となって活動しているというのがポイントです。パターンとしては行政から何人かの人たち、グループが依頼されて始めて、そのうち、住民主導になってきたというパターン。住民自ら結成して行政を動かしたというパターン。いずれも行政と協働していくことになるのですが、最初から行政と協働するタイプ。どれも住民が主体となって活動しているというのがスタイル。これ、逆に言うと住民が主体ではなくなった町、つまり、行政がやりたい、やりたいといって WaW タウンとして何とか登録したいというふうにやったとしても登録を抹消される。あの町とか村は前はそうだったのだけど、今は WaW タウンではないというところもあります。行政からスタートしても住民の中にそれを実現していこうという人たちがいないようなところはダメです。活動メンバーの構成は、退職した高齢者の人が多い。1930 年代にキンダースコート事件が起きた時のように主流だった労働者が歩く権利を主張しているという訳ではなくて、現在は知識階級が入っている保守的な層ですね。元技術者とか公務員みたいな人たちが中心となって、彼らは技術とか知識がありますので、そういうのを生かして各地で WaW タウンの活動を自分たちの住んでいるところで起こして展開し発展させています。

課題としては、若者をどういうふうに取り込むかが今後の課題。活動のメンバーにもそうだし、ウォークの参加もそう。例外として少数はいるが、先ほどのパブの経営者もいますし、子どもウォークとかファミリーウォークとかもやっているのですが、20 代くらいの若者の参加者が少ない。スコットランドのランブラーズ協会なんかは若者が最近参加しているという情報も得たのですが、それは今時ですが SNS に写真を載せたいがためにフットパスを歩くという、そういう SNS 写真を載せたいグループと登山が好きなグループという

ふうに若者のウォーカーズグループの中にも特徴が分かれている。そういう今時の集まり方をしているのが面白いですね。

ということで、終わりに入りたいのですが、ずっと見てきましたが、人々の身近にある自然、日常的な、歴史的な遺産であるフットパスとの関わりが特徴。それは法的整備もあるし、レジャー活動の大衆化、環境保全によって存続、維持管理されてきたというのがあります。そんな中で、各地で WaW 活動によってフットパスが活用され地域が活性化されてきたという状況は非常に新しい動きでコミュニティの活性化などを考える上で、非常に新しいといえると思います。

先ほど、最初に西山先生が歩く意味が変化している社会変化、社会がどう変わったかということと連動しているのではないかとということで、昨日も下休場先生の問題提起とか小林先生のそれに対するコメントを踏まえて昨日の夜に考えたのですが、今現在、フットパスの活用と地域活性化は単に経済振興、経済効果を上げるということではなく地域内のコミュニティを活性化する、地域の中の社会関係やネットワークを形成して交流を促進する。地域外の交流も促進するというような活性化であります。そういうことを考えていくと、イギリスで19世紀後半以降の近代観光の成立の中で人々がスピード感とかパノラマ的な眺望みたいなそういった娯楽を求める、観光に限らず博物館とかデパートもそうですが、そういった眺望とか文化遺産を楽しもうとする娯楽に対する意識が変化してきている。目的地に点から点へ移動する、シュッと速く行くことに喜びを感じるというか、そこに夢を見いだしていたのではなくもうちょっと流れる車窓の風景ではなくゆっくり歩いて、点ではなく面を知っていくような人々の娯楽に対する意識の変化もあるのかもしれない。そこに現実感というか、そこに自分がいるというそこに生きているんだ、生きている人と実際に歩く速度で接したり体験したり関わったりする中で、自分も生きているという感覚を得ることができるというのがいいという感じになっているのではないかと感じています。

今までとは逆説的な感じで、新しい形の地域活性化、逆にゆっくりとした人々との関わりや地域との関係が地域活性化に、今までとは違う形で豊かさにつながる。まさに時代の変化、21世紀型、逆にアナログに戻って行っているみたいな感じのところが、歩く観光の可能性ではないかと昨日の夜遅くに考えました。以上です。ありがとうございます。

<<質疑応答>>

西川克之

まず個人的なことを申し上げて恐縮ですが、私は1996年から97年にかけてイギリスに家族で滞在する機会がありまして、そのときにコッツウォルズ周辺を車で巡ったのですが、羊が草を食むような風景を本当に懐かしく拝見しました。

お話は興味深くていろいろと考えさせられる、あるいは思うところがたくさんあったのですが、昨日参加しておらず話の流れを把握しておりませんので、アウトオブコンテクス

トな質問になるかもしれませんが、その点お許しください。まず、大きなコメントとしまして、最後に塩路先生が、自律的観光としてフットパスがあるのではないかと示唆されましたが、それに絡めて、このような歩く観光、フットパスを中心とした観光によって、私たちは何を回復しようとしているのかといったことを漠然と考えました。私はイギリスの18世紀後半以降の社会とか文化あるいは観光のあり方について関心を持っているのですが、前段の歴史的な振り返りの中で、囲い込み運動があつて、そこからこのようなナショナルトレイルという動きにつながっていったという大きなお話がありました。つまり、エンクロージャー、囲い込みによって土地管理が進んでいく、そしてそこに資本主義的な農業が導入されていく。これは農村で起こった話ですが、一方で都市においては、資源、資本、労働力が囲い込まれることによって、資本家と労働者との間に大きな境界線が引かれていく。こうして、農村ではそれ以前の社会で小さな土地で営農していた小作農的な階級が衰退していく一方で、都市においても職人的な人たちが衰退して、資本家と労働者に分けられていく、そのような都市と農村で同じような、いわゆる近代化のプロセスがある中で、観光という大衆化された社会慣習が余暇活動のひとつとして誕生していく。そういう社会的に複雑なプロセスの中でいわば田園風景というものが再発見され、またフットパスというものが新たな社会的・文化的意味を帯びたものとして作り直されていくというストーリーであるとうかがったわけです。

そうして考えていくと、フットパスというのが、かつて小規模な土地所有が許されていた小作農たちがたくさん地域に根を下ろして農業を営んでいた時代が変容し、労働者層が都市に誕生していった、1930年代はむしろ都市の労働者が田園を歩いて行き、そこでフットパスに対して権利を主張してくる、という展開がある。一方で、レイク・ディスクリストから始まった観光のあり方とコッツウォルズを中心としたイギリスらしい田園風景の発見といったような、いわばロマン主義的な眼差しが構築されていく傾向ともない交ぜになってフットパスが成立していく、そのあたりの階級制を含んだフットパスの歴史について特に興味深く拝聴しました。

もう一つ面白かったのは、最後のほうに北部イングランドで労働者の町にフットパスが形成されていく、つまり、工場地帯が谷にあつてそこから少し離れたところに住んでいた労働者たちがかつて通っていた道、それがフットパスになっているという点です。これはコッツウォルズのような田園風景とはかなり異なると思うのですが、フットパスというものの多様化ということで大変興味深くうかがいました。工場地帯があり、労働者たちがその外に暮らしている。工場まで労働者たちは歩いて通うところにしか住めない。公共交通機関、当時は馬車鉄道かもしれませんが、を使う余裕はなく、歩いてしか通えない。労働者の住居区域のさらに外側に恐らく資本家階級の人たちが豊かな田園風景の中に暮らしていたが、その空間構成は截然と区分けされ、彼らが労働者の街区を通ることはあり得なかった。こうしてかつては中流層の人々の視線が向けられることがあり得なかった労働者たちが通っていた道を、いまはフットパスに組み込もうとしているあり方について、特に興

味深くうかがいました。つまり、レイク・ディストリクトから発するような田園風景、それにコッツウォルズのような英国らしい田舎の周辺を巡るフットパスと、北部イングランドの労働者階級の町、労働者たちが歩いていた通りを復元していこうというようなフットパスのあり方の間にあるコントラストを抱え込みながら、多様に発展しているイギリスのフットパス運動の展開は大変興味深く感じました。

そこで質問ですが、活動メンバーがどちらかというと富裕階級の人たちが中心のようなコッツウォルズのようなフットパス運動に潜在するある種のイデオロギー性に対する警戒感、反発感が、たとえばヘブデン・ブリッジのようなかつての労働者街区を舞台としたフットパス運動にあるのかどうか、あるいはそうしたコントラストを土台にしていた多様化、すなわと、うちではそうではない形でやっていこう、地域の歴史に根ざしてやっていこうというような、主流のモデルに対するある種の反発や反省なりに基づいた多様化のあり方があるのかどうか、そうした点について、お考えを伺いたいと思います。

塩路有子

ほぼまとめていただいたようなものでとても勉強になります。

最後の質問は、ウィンチコムに限らずだいたい保守的な中流階級の人々が WaW の活動を展開していき、いわゆる労働者階級の人あまり入っていないという傾向が各地で見られています。ワーキングクラスの人がそれに対して反発とか反抗しているということまではまだ至っていないのか、むしろその活動で町が活性化して元気良くなって行くところに向かってワーキングクラスの人たちが移住して来たりとか、若いファミリーが移住してきたりとか。ということで、その地域が宅地開発で若い人たちが増えてきて、人口的に平均年齢が下がって若いコミュニティになって行くという傾向があるので、ワーキングクラスの人たちは反対とか反発と言うよりもむしろそれを利用してというか、のっかって、自分たちもうまくやっている。それでウォーキングも楽しむという感じだと思います。昔のランブラーズ協会が労働者たちによって成ったというようなところが北イングランドにあるのかなと思って注視していたのですが、あまりなくてがっかりしました。しかし、だからこそ、より知識や技術、経験のある人たちが活動を展開しているので、全国にある種の社会改革運動みたいな形でフットパス化、フットパスの活用という活動が発展しているのではないかと思います。

毛谷村英治

ありがとうございます。すごく面白く拝聴しました。私は昭和 30 年代生まれなので、フットパスという言葉にあまりなじみがない。世間では今よく使われているんですけども、僕たちが育った頃はピクニックやハイキングという言葉を使っていた。何が違うんだろうということを考えていたんですけど、ピクニックそのものは野外でものを食べるということ。なので、これは除外。ハイキングと何が違うかというと、ハイキングは山歩きみ

たいなもの。長距離を歩くという意味。そこで、フットパスとどう違うかという話になったときに、今日、お話を伺った中で分かったのは獣道みたいなものなのかな。動物がいつも走っていたので足跡がついてしまうという風なものと一緒にのかなと思ったんです。動物の獣道というのは直線的に必要なところを結んでいるだけではなくて、あぶない動物がいたらそこを避けてみたり、マーキングをするために自分の気に入ったところに立ち寄ってみたりというがあるので、フットパスみたいに景色のいいところをわざわざ見に行ってみようとか、危険なところは避けて通ろうとか、そういったことで作られたのがフットパスなのかな。ハイキングとの違いでいえば、恐らく今日、お見せいただいた写真の中では花畑とかそういったものに関していうと、ハイキングといってもおかしくないと思うんですけども、炭鉱跡の遺跡というようなところになってくると、恐らくハイキングという言葉を使うと違和感があると思います。もしかしたら、フットパスは自然を見るためではなく、人の営み、人が作ったもの、畑とか牧草地を見るというふうなことになるので、だから獣道と違い、自分の意図に応じて道が変わっていつてそれを使うようになったというのがフットパスのルーツなのかなと思いました。それをすごく理解できたのでよかったです。その中で WaW のお話が出て来んですけども、ハイキングとか自然景観を美しく維持するとかあるいは暮らしている人たちが看板規制をするとか景観保全をするとかそれを総合的に扱うとかコメントしてフットパスに適した場所を作りましょう。あるいは人を呼び込んで町を活性化しましょう。というふうに企んでいるのが WaW なのかなと思うとかなり俗っぽいのかなという気がしたんですね。ハイキングのときの概念だとそういうことは考えずに、健康志向だけで山歩きをしようとしていたのが、もう少し人間的なというかちょっと俗っぽい、社会的な営みの中で自分たちのイメージを良くして正しく暮らしていこうという風に出て来た概念というのがフットパスであるという、あるいはそれを守っていこうとする WaW という風に理解したんですけども。そんな風な理解で間違いはないでしょうか。

塩路有子

はい。間違いないと思います。社会的活動の一環として自分たちの住んでいるところをより良くするためにやるような位置づけでいいかと思います。WaW の活動、フットパスを活用したウォーカーを呼び込む。自分たちもウォークを楽しむという、そういう活動だと思います。

毛谷村英治

そういう風に理解した上で、日本語に直すと街歩きとか、もっとずっと昔の言葉でいうなら散歩っていうのが一番和訳としてはあってるのではないかなと思ったのですが、それはどうでしょう？

塩路有子

散歩とか街歩きとかの違いというのは、突き詰めるというよりもむしろ、イギリスでの歩くことがフットパスというコンテンツの中で考える方がいいのじゃないかなと思ひまして、それに日本的な街歩きの要素が入っているならそれもよし、散歩っていう日常的な犬を連れた散歩というのもフットパスにはありますので、それでもよし、というような。それも組み込んだ感じがフットパスでいいかなとイギリスの場合は思いますが、ただ、それが日本の、次にお話になる神谷さんの日本のフットパスでお話になると思いますが、そこでは違うんだよというところがばしっと出てくる可能性があります。日本の街歩き、観光という概念と日本におけるフットパスの活動の展開というのは違うというのはあると思います。次のご発表に質問を譲りたいと思います。

Public rights of way（公衆用の権利通行道路）

- Public footpath：歩行者だけが通行できる道
- Public bridleway：自転車や乗馬による通行が許される。
- Restricted byway：自転車や乗馬、馬車などの通行が許される。
- Byway open to all traffic：自転車や馬車などに加えて車両の通行も許される。

（４）フットパスに関する法的整備・レジャー活動と環境保全等

フットパスに関する法的整備	レジャー活動と環境保全等
1932年 キンダースcott事件 「歩く権利法」の成立	1930年代 ピーク・ディストリクトが人気の散策地になる。
1949年 国立公園法に「カントリーサイドへの立ち入りを認める法律」が併記	
	1970年代～80年代 カントリーウォークが盛んになる。
1990年 「歩く権利法」改正 フットパスを地主の都合による閉鎖から守ることが強化された。	1980年代以降 政府、地方行政によるカントリーサイドの環境保全と観光促進
2000年 カントリーサイド歩く権利法2000 荒地、森林地なども対象とした公的アクセス権が確立	2000年代以降 政府、地方行政による健康、福祉対策の強化（ウォーキングの活用と補助）

<多様なWaWタウン:その特徴と違い>

イングランド: 歩くことに関心のある活動的な人々によって運営

南部: ウィンチコム、ダースレイ (Cotswold AONB)

ロス・オン・ワイ (Wye Valley AONB)、ウィブリスコム

ネザー & オーバー・ストウエイズ (Quantock Hills AONB)

ダンスター、ポーロック、リンマス、リントン (Exmoor National Park)

北部: ヘブデン・ブリッジ、トッドモーデン、マイオロイド

オトレイ、バーレイ、ベイルドン、ビングレイ (Nidderdale AONBの外れ)

* イングランド北部は、他の地域と比べ、より自立的な活動姿勢をもち、コミュニティを自分たちで改革しようとする意識が強い。

ウェールズ: イングランドと同じ

チェプストウ (Wye Valley AONBの外れ)

スコットランド: + 農家も活動メンバー

南部: キルサイス、モファット、メルローズ、

ニュートン・スチュワート (Galloway Forest Parkの外れ)

<WaWタウンの活動スタイルと課題>

- 住民が主体となって活動
行政から依頼 → 住民主導へ
住民が結成 → 行政を動かす
行政と協働
- 活動メンバーの構成
退職した高齢者が多い。1930年代に主流だった労働者ではなく、現在は知識階級が入る保守的な層(技術者、教師、公務員など)。その技術や能力、知識を活かして、各地でWaWタウン活動を展開、発展させている。
- 「若者をどのように取り込むか」が今後の課題
活動メンバー: 若い世代は少数(eg: ウィブリスコム)
ウォークへの参加: 子供ウォーク(+家族)。若者の参加少数。
* グラスゴーなどでは、ランブラーズ協会に若者が参加。